



ILCAA
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
2011

目 次

所長あいさつ	02
--------------	----

概 要

AA研の研究活動	04
研究・運営体制	05
研究組織構成	07
研究連携ネットワーク	08
研究スタッフ	09

共同研究

基幹研究	12
共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)	13
ネットワークの構築	20
大型プロジェクト	21
既形成拠点	22

研究資源

アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源	24
出版物	24
海外研究拠点	25
音声学実験室	26
文献資料コレクション	26

研究者養成

研究者養成のための事業	28
言語研修	29
フィールド言語学ワークショップ	29
中東・イスラーム関連セミナー	30
コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)	31
Fieldling フィールド言語学コミュニティ	31
アクセスマップ	32

付録:関連資料



アジア・アフリカ言語文化研究所所長

栗原 浩英

所長あいさつ

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする全国共同利用研究所として1964年に設置されました。それ以来46年間、国内外の研究者との共同研究の展開、海外学術調査の実施と総括、研究資料の蓄積と公開、言語研修など研修事業を通じた若手研究者養成への寄与、辞典編纂などを通じて、日本のアジア・アフリカ研究をリードし、その発展と深化に大きな役割を果たしてきました。2010年度からはそれまでの成果を継承・発展させるべく、本研究所は新たに発足した「共同利用・共同研究拠点」制度の下で、より一層国内外に開かれた「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として新たなスタートを切りました。

さて、アジア・アフリカは広大で、多様性に富み、あらゆる点で奥の深い地域です。その中には近年著しい発展を遂げ、政治的・経済的に発言力を増大させている国や地域がある一方で、紛争と貧困から脱却できずにいる地域もあります。このアジア・アフリカに地球人口の70%を越す人々（約48億人）が暮らしていることを考えれば、その動向が日本のみならず地球社会の未来を大きく左右することになるといっても過言ではないでしょう。このような重要性をもつアジア・アフリカを根本から理解するためには、本研究所が創立以来と取り組んできたような、アジア・アフリカの言語文化の深層に食い込んだ研究をさらに発展させることが求められます。

とはいえ、広大かつ多様で、奥の深いアジア・アフリカを研究するためには、本研究所のスタッフだけでカバーしきれるものではありません。研究所の枠、さらには本研究所が附置されている国立大学法人東京外国語大学の枠を越えて、国内外の広範な研究者コミュニティからの協力を得ることが必要不可欠です。それと同時に、研究者コミュニティの要望を反映させながら、研究所として重視する領域を明確にするために2010年度から開始した四つの基幹研究―「言語ダイナミクス科学研究」、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」、「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探究」―も、より一層の研究の進展が必要です。今後とも、本研究所は国内外の研究者コミュニティとの連携強化・拡大を進め、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」の名にふさわしい活動をする所存です。皆様のより一層のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

タイ、チョンブリー県サタヒーブ：丘からの眺め 撮影：古谷伸子



概要

人と人をつなぎ
新たな認識をひらく



AA研の研究活動

アジア・アフリカ言語文化研究所(以下、AA研)は、文部科学大臣によって言語学、文化人類学、地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」です。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公私立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008(平成20)年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・共同研究拠点に認定されました。

共同利用・共同研究拠点としての本研究所の使命は、今日、人類の7割を超える人びとが暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与すること、また、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求することにあります。

この目的を達するため、本研究所では主に以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進しています。

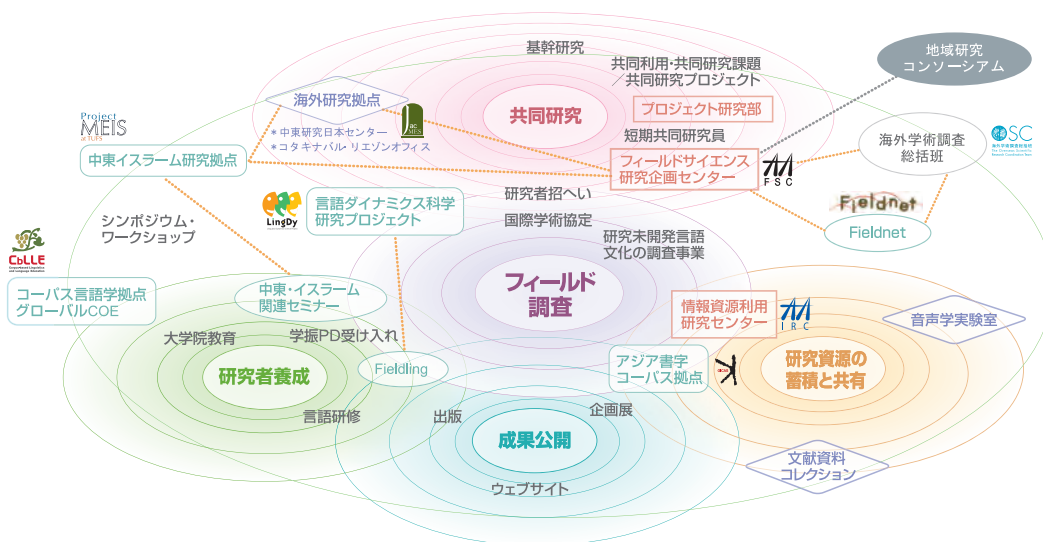
- 1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同利用・共同研究
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂および研究成果の発信

3) 研究活動および研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

このうち、特に1)と3)の推進にあたっては、本研究所が設置・運営している2つの海外拠点も有効に活用し、国境を越えた現地共同研究や、国外の関連研究者の参加を得る形での次世代研究者養成を実現しています。

2011(平成23)年度には、新たに8つの共同利用・共同研究課題が発足しました。これらの研究課題は、AA研所員が、国内外で最先端の研究を行っている300名を超える研究者と共に、緊密に連絡を取りながら展開しています。すべての研究課題は公募の上、所外の研究者が過半数を占める委員会による厳格な審査を経て採択されたものです。

一方、本研究所の場合、研究対象となる地域と学問分野が非常に広く、所員の専門も多岐にわたることから、ともすれば共同利用・共同研究拠点としての特徴がわかりにくくなってしまいうという問題を抱えていました。そこで、2010(平成22)年度からは、「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」「中東・イスラム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探究」の4つを研究所の基幹研究に選び、拠点としての特徴を外部的に示すようにしています。4つの基幹研究は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究費や特別教育研究経費(拠点形成)を得てすでに研究所内に形成されている「アジア書字コーパス拠点」「中東イスラム研究拠点」と並ぶAA研の顔として、公募による共同利用・共同研究課題と連携しつつ、強力かつ集中的な共同研究を進めています。



研究・運営体制



研究・運営体制

共同利用・共同研究拠点である本研究所には、研究者コミュニティの意向をいっそう明確に拠点運営に反映し機能を適切に遂行するために、外部の研究者を含む以下の委員会が置かれています。

2011(平成23)年度の各委員会の概要と、それぞれの委員は次のとおりです。

運営委員会

運営委員会は、過半数を占める外部委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員とで組織されます。運営委員会は、AA研の共同利用・共同研究の重要事項および研究活動全般に関する協議を行います。

岩下 明裕(北海道大学スラブ研究センター教授)
 熊本 裕(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 栗林 均(東北大学東北アジア研究センター教授)
 佐藤 洋一郎(総合地球環境学研究所教授)
 瀬川 昌久(東北大学東北アジア研究センター教授)
 竹中 英俊(東京大学出版会編集局長)
 富永 智津子(元・宮城学院女子大学学芸学部教授)
 西尾 哲夫(国立民族学博物館教授)
 渡邊 興亜(総合研究大学院大学監事)
 栗原 浩英(AA研所長)
 三尾 裕子(AA研副所長)
 永原 陽子(AA研情報資源利用研究センター長)
 西井 涼子(AA研フィールドサイエンス研究企画センター長)
 黒木 英充(AA研)
 深澤 秀夫(AA研)
 町田 和彦(AA研)

共同研究専門委員会

共同研究専門委員会は、過半数を占める外部委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員とで組織されます。AA研が公募する共同研究課題の審査および実施中の共同研究課題の評価を行います。

北川 勝彦(関西大学経済学部教授)
 倉沢 愛子(慶應義塾大学経済学部教授)
 栗本 英世(大阪大学グローバルコラボレーションセンター長/教授)
 清水 展(京都大学東南アジア研究所教授)
 庄垣内 正弘(京都産業大学文化学部教授)

林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 水島 司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 横山 伊徳(東京大学史料編纂所教授)
 栗原 浩英(AA研所長)
 三尾 裕子(AA研副所長)
 永原 陽子(AA研情報資源利用研究センター長)
 西井 涼子(AA研フィールドサイエンス研究企画センター長)
 黒木 英充(AA研)
 深澤 秀夫(AA研)
 町田 和彦(AA研)

研修専門委員会

研究所が主催する言語研修およびその他の研修事業に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

岸田 文隆(大阪大学大学院言語文化研究科教授)
 高橋 明(大阪大学世界言語研究センター長/教授)
 林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 吉田 和彦(京都大学大学院文学研究科教授)
 高島 淳(AA研)
 豊島 正之(AA研)
 稗田 乃(AA研)
 町田 和彦(AA研)
 峰岸 真琴(AA研)
 澤田 英夫(AA研)
 中山 俊秀(AA研)
 渡辺 己(AA研)

海外調査専門委員会

本研究所が行う海外学術調査総括班事業および海外学術調査に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

伊藤 元己(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 梅崎 昌裕(東京大学大学院医学系研究科准教授)
 岡本 正明(京都大学東南アジア研究所教授)
 木村 秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 窪田 順平(総合地球環境学研究所研究部准教授)
 曾我 亨(弘前大学人文学部准教授)
 高樋 さち子(秋田大学教育文化学部准教授)
 蓮井 和久(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科講師)
 藤田 耕史(名古屋大学環境学研究所准教授)
 本山 秀明(国立極地研究所教授)
 西井 涼子(AA研)
 深澤 秀夫(AA研)

荒川 慎太郎 (AA研)
 近藤 信彰 (AA研)
 椎野 若菜 (AA研)
 渡辺 己 (AA研)
 津田 浩司 (AA研)

編集専門委員会

研究所の出版・広報の方針の設定及び出版物の審査などに関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

石川 登 (京都大学東南アジア研究所准教授)
 梶 茂樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
 新免 康 (中央大学文学部教授)
 鷹木 恵子 (桜美林大学国際学部教授)
 森口 恒一 (静岡大学人文学部教授)
 吉澤 誠一郎 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
 中見 立夫 (AA研)
 稗田 乃 (AA研)
 河合 香吏 (AA研)
 呉人 徳司 (AA研)
 近藤 信彰 (AA研)
 津田 浩司 (AA研)
 錦田 愛子 (AA研)

国際諮問委員会

国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

ARTAWA, Ketut (Professor, Udayana University)
 DIALLO, Abdourahmane (Private dozent, Goethe-University of Frankfurt)
 GROSSHEIM, Martin (Lecturer, Passau University)
 van der MOLEN, Willem (Professor, Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies (KITLV))
 呉 英喆 (内モンゴル大学モンゴル学学院モンゴル語文研究所副研究員)
 呉 小安 (北京大学教授)
 齐木徳道尔吉 (内モンゴル大学教授)
 陳 劍 (復旦大学教授)
 陳 麗君 (国立成功大学台湾文学系准教授)
 黒木 英充 (AA研)
 芝野 耕司 (AA研)

クリスチャン・ダニエルス (AA研)
 塩原 朝子 (AA研)
 津田 浩司 (AA研)

海外拠点専門委員会

本研究所の海外拠点における共同利用・共同研究に関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

内堀 基光 (放送大学教養学部教授)
 奥田 敦 (慶應義塾大学総合政策学部教授)
 私市 正年 (上智大学アジア文化研究所教授)
 酒井 啓子 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)
 谷口 淳一 (京都女子大学文学部准教授)
 長沢 栄治 (東京大学東洋文化研究所教授)
 黒木 英充 (AA研)
 西井 涼子 (AA研)
 三尾 裕子 (AA研)
 太田 信宏 (AA研)
 床呂 郁哉 (AA研)

中東研究日本センター諮問委員会

レバノン共和国ベイルート市に設置された中東研究日本センター (JaCMES) の活動に関わる事項について、所長の諮問に応じます。

ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim (Professor, Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut)
 KARAM, Khalil (Vice-President, Saint Joseph University)
 DAHER, Massoud (Professor, Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University)
 黒木 英充 (AA研)

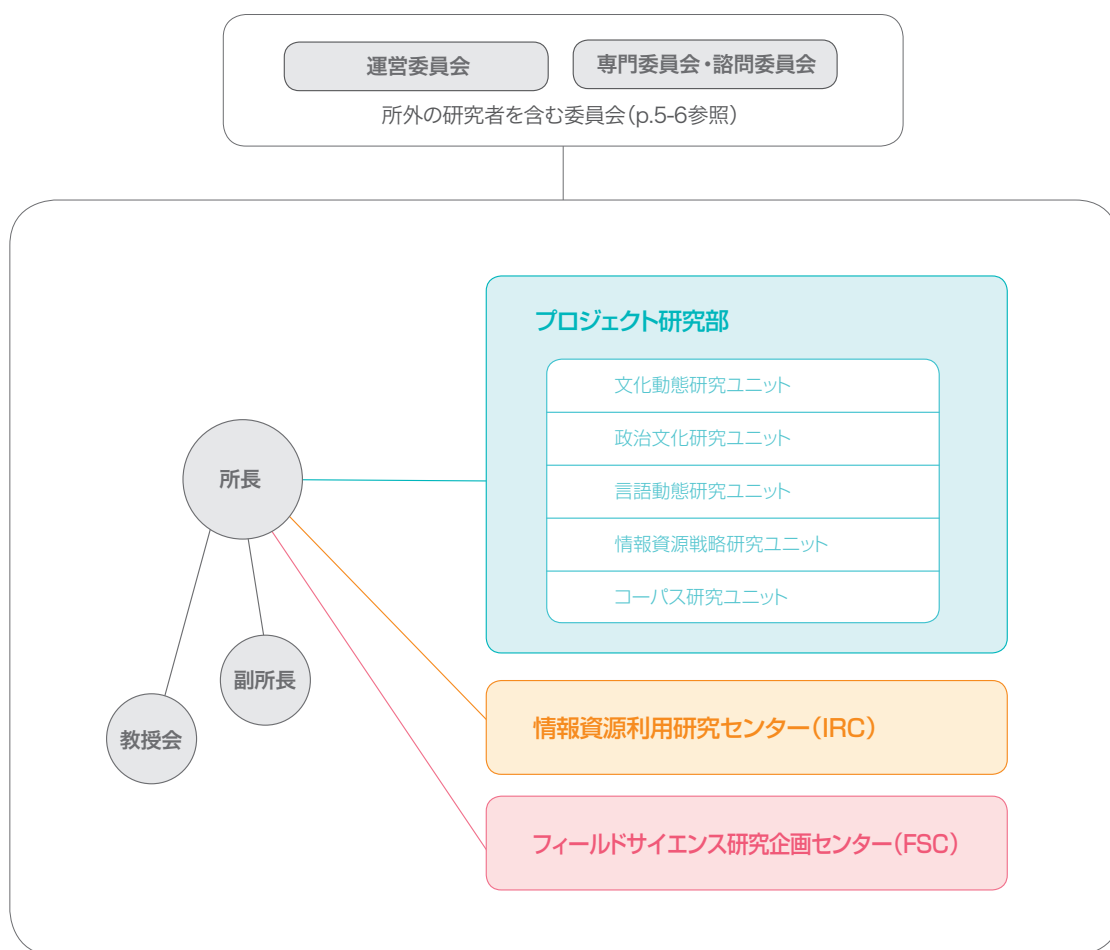
研究組織構成



研究組織構成

本研究所は5つの研究ユニット(言語動態、文化動態、政治文化、情報資源戦略、コーパス)から成る1プロジェクト研究部および2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画)という組織体制をとっています。所

員はいずれかのユニットまたはセンターに所属しています。そして、個々の専門研究領域に関わる探究を深めながら、基幹研究、共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)などにも参画し、国内外の研究者との密接な協力に基づいて、共同利用・共同研究拠点にふさわしい活動を推進しています。



情報資源利用研究センター (IRC)

アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流を推進するAA研の附置センターです。例えば、さまざまな資料のデジタル化やデータベース化の支援や公開、またその方法論の開発を行っています。

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/>

フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

AA研の研究活動の特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。また、2つの海外研究拠点を維持・運営しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/>



研究連携ネットワーク

本研究所は、広くアジア・アフリカの言語学・歴史学・人類学・地域研究の研究を行う研究者・次世代研究者のネットワークの中核になっています。

組織や国の枠を越えた共同研究を進めるとともに、より広い視野でネットワークを形成・維持するため、主に次のような活動に取り組んでいます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/network/>

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

所内外の研究代表者のリーダーシップのもとに、所員と所外の研究者が共同で行う研究プロジェクトです。

今年度実施されるプロジェクトについては、p.13以降をご参照下さい。

海外学術調査総括班

「海外学術調査総括班」は、1975(昭和50)年以来、AA研に事務局をおき、科学研究費補助金(海外学術調査)にかかわる研究者間、および研究者側と文部科学省／日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などに当たってきました。海外学術調査を行う研究者間の情報交換を目的としてAA研が取り組んでいる研究連携事業の1つです。

オンラインによる情報交換サイト(「フィールドネット」)も運営しています。

学術交流協定

海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究・調査等の国際的学術交流を推進しています。

友の会

これまでにAA研に所属した研究者との関係を維持し、国際的なネットワークを形成することを目的として「友の会」を設置しています。

地域研究コンソーシアム(JCAS)

「地域研究コンソーシアム」とは、地域研究に関わる全国の組織のネットワーク形成を目指している、アカデミック・コミュニティに立脚する新しい型の組織連携です。AA研は、本コンソーシアムの幹事組織としてその運営に積極的に参画しています。

<http://www.jcas.jp/>



研究スタッフ

【専任教員】

本研究所に専任で所属し個々の研究を行うほか、アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同利用・共同研究拠点の機能を十分に発揮するために共同研究等を組織することによって、研究者コミュニティへの情報提供を行うとともに、国内外の研究者をつなげる役を果たします。

言語動態研究ユニット

教授	稗田 乃	アフリカ言語学
准教授	呉人 徳司	言語学、チュクチ語
准教授	塩原 朝子	言語学、インドネシア諸言語の記述研究
准教授	星 泉	チベット文化圏の言語学

文化動態研究ユニット

教授	宮崎 恒二	オーストロネシア社会
准教授	河合 香吏	人類学、東アフリカ牧畜民研究
助教	錦田 愛子	中東地域研究

政治文化研究ユニット

教授	クリスチャン・ダニエルス	中国西南部：タイ文化圏の歴史
教授	栗原 浩英	ベトナム現代史
教授	中見 立夫	東アジア・内陸の国際関係史
客員教授	斉木徳道 爾吉	モンゴル史、清朝史 (H23.1.6～H23.5.23)
客員准教授	GROSSHEIM, Martin	ベトナム現代史 (H22.9.1～H23.8.31)

情報資源戦略研究ユニット

教授	豊島 正之	中世日本語文献学
准教授	伊藤 智ゆき	音韻論、中期朝鮮語、中国語中古音
准教授	陶安 あんど	中国法制史と法社会学
客員教授	陳 剣	中国古文字学 (H22.9.1～H23.8.31)

コーパス研究ユニット

教授	中谷 英明	インド仏教学、中期インド語学、総合人間学
教授	芝野 耕司	マルチメディア・データベース、多言語処理論、CALL
教授	峰岸 真琴	東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
准教授	高松 洋一	オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学

【外国人研究員】

本研究所では、共同研究やさまざまな研究活動を通じた交流と学術研究の推進を図るため、例年4～6名の研究員を、6ヶ月～1年間の期間で外国から招へいしています。外国人研究員には「客員教授」または「客員准教授」の肩書きが与えられます。

情報資源利用研究センター

教授	永原 陽子	南部アフリカの歴史
教授	飯塚 正人	イスラーム学・中東地域研究
教授	小田 淳一	計量文献学
教授	高島 淳	宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教)、言語情報処理
教授	町田 和彦	南アジアの言語学
准教授	澤田 英夫	カチン州および東北インドのチベット・ビルマ系言語の記述的研究
准教授	中山 俊秀	ワカシュ諸言語(北米北西海岸)、言語類型論、言語人類学
助教	石川 博樹	東アフリカの歴史

フィールドサイエンス研究企画センター

教授	西井 涼子	東南アジア大陸部の人類学
教授	黒木 英充	中東地域研究・東アラブ近代史
教授	深澤 秀夫	マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
教授	三尾 裕子	東アジアの人類学
准教授	荒川 慎太郎	西夏語学、西夏語文献学
准教授	太田 信宏	インドの歴史
准教授	近藤 信彰	イラン近代史
准教授	椎野 若菜	社会人類学、東アフリカ民族誌
准教授	床呂 郁哉	東南アジア島嶼部の人類学
准教授	渡辺 己	セイリッシュ語
助教	津田 浩司	東南アジア島嶼部(特にインドネシア)の華人社会研究
客員准教授	陳 麗君	言語学 (H22.9.15～H23.7.15)

【特任研究員・研究機関研究員】

本研究所の専攻分野について高度な研究能力を持ち、将来、学界での活躍が期待される若手研究者を、一定期間にわたり本研究所で雇用しています。

特任研究員	梅川 通久	地域情報学、地理情報分析
特任研究員	小副川 琢	政治学(特に国際関係論、比較政治学)、中東地域研究(特にレバノン)
特任研究員	小田 昌教	文化人類学、現代美術、メディア・アクティヴィズム研究
特任研究員	長崎 郁	記述言語学、ユカギール語
特任研究員	松田 訓典	インド大乘仏教
研究機関研究員	石森 大知	文化人類学、オセアニア地域研究
研究機関研究員	大川 真由子	社会人類学、中東地域研究、帰還移民研究
研究機関研究員	大塚 行誠	言語学、チベット・ビルマ語派
研究機関研究員	児島 康宏	言語学、カフカス諸語
研究機関研究員	古谷 伸子	文化人類学、タイ研究
研究機関研究員	福島 康博	イスラーム金融論、マレーシア研究
研究機関研究員	村尾 るみこ	アフリカ地域研究、生態人類学

ケニア：男性の集団通過儀礼におしゃれして参集した牧畜民チャムスの少女たち 撮影：河合香史



共同研究

人と人をつなぎ
知と知をつなぐ場

基幹研究

共同利用・共同研究拠点である本研究所の中期的研究戦略の柱として、研究所内で自発的に組織された研究班によって展開される共同研究軸です。2010(平成22)年度から3年の計画で以下の課題が基幹研究として設定されました。

【言語ダイナミクス科学研究】

代表者：中山 俊秀

本基幹研究は、①言語多様性の記録のための研究活動(Language Description & Documentation)の活性化と、②言語運用と変化の実際、言語の多様性の実際を踏まえた、ダイナミックな現象・システムとしての言語の研究(Linguistic Dynamics Science)の新展開を目的として組織された。具体的には以下のような活動を通して関連研究を先導していく：

- ・危機言語を中心とした研究未開発言語の臨地研究の推進
- ・記述研究を支える方法論開発と共同研究インフラの整備
- ・言語運用の実際を基盤とした理論研究枠組みの再構築
- ・言語の構造的多様性の幅と深さ、およびその多様性に見られる規則性の研究
- ・言語構造の形成・変化に見られる規則性の探求とそれを形作る動機付けの多面的研究

<http://lingdy.aacore.jp/>

【アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求】

代表者：永原 陽子

本基幹研究の主たる目的は、グローバル化のなかで大きな変容を迫られているアフリカ諸地域の文化を研究する本研究所の人類学・地域研究(歴史学)研究者が、各自の研究活動に立脚しつつ、共同で多元的世界像の探求・構築を進めることである。

アフリカ文化研究の具体的なトピックとしては、たとえば、植民地経験と社会変化、遊牧民/牧畜民と農耕民、人の移動と集団間関係、社会の中の女性/シングル、などがあげられる。メンバーが個々にこのようなトピックで研究をすすめて、研究班全体として、公開研究会・セミナーの開催、海外研究者との連携によるシンポジウムの開催などを行い、ウェブサイト等をつうじて研究成果の発信を行う。

以上のようなアフリカ文化の基礎研究は、紛争・難民、政治的民主化、社会的差別等、現代アフリカの抱える諸問題の理解と解決に不可欠であるばかりでなく、それらの問題の根本にある近現代世界の構造そのものを問い直し多元的な世界像を構築するのに寄与するものと期待される。

<http://aaafrica.aacore.jp/>



【人類学におけるミクロ・マクロ系の連関】

代表者：深澤 秀夫

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブへの関心が高まってきた。

また他方では、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、ミクロ・パースペクティブを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。

こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の呈示を企図するものである。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

【中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成】

代表者：黒木 英充

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて、「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラームのネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関、などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005(平成17)～2009(平成21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展形である。バイルート・コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、バイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究/教育セミナー、バイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成にも当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

<http://meis2.aacore.jp/>

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)



集い、究める

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

共同利用・共同研究拠点である本研究所にとって、所員が所外の研究者と共同で推進する共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)は、もっとも大切な研究事業のひとつです。プロジェクトに参加する所外の研究者は、AA研の「共同研究員」の身分を委嘱されます。

各プロジェクトは毎年、所外の研究者を含む「共同研究専門委員会」によって、その研究成果や広報、そして学術的意義において評価されます。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約650点におよぶ出版物や、オンライン辞書・データベースなど、多様な研究成果をあげています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/>

2011(平成23)年度に進行中の研究課題

以下のリストでは、大きく分野ごとに分けていますが、多くの研究プロジェクトが複数の分野にまたがるテーマを扱っています。

■言語学系

【朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築】

2009～2011年度

代表者: 伊藤 智ゆき 所員1/共同研究員16

古代～現代という長年に亘る朝鮮語の歴史言語学的研究においては、表記法上の制限(15世紀にハングルが創製されるまでは朝鮮語は基本的に漢字のみで書き表されていた)や、文献間もしくは一文献内における言語学的現象の揺れや非一貫性、といった問題点を克服するため、専門的かつ厳密な書誌学的検討、膨大な資料のデータ処理、歴史的発展を辿るための現代朝鮮語諸方言研究等、一個人の研究ではカバーしきれない、多様な研究知識と経験、分析技術、研究資源の蓄積が必要とされる。本研究プロジェクトでは、朝鮮語史研究を専門とする多くの研究者が共同でこれら問題点の多角的検討に当たり、研究資源共有のための技術開発、構築手法の研究を進めながら、主としてwwwサイトを通じ研究資源・成果を公開していくことで、朝鮮語史研究の更なる発展と、広く朝鮮語研究・言語学研究一般への国際的貢献を目指す。

<http://www.kriling.com/>

【宣教に伴う言語学(第2期)】

2009～2011年度

代表者: 豊島 正之 所員2/共同研究員7

大航海時代のキリスト教宣教に伴って16～17世紀に作成された布教対象語の研究書(辞書・文法書)及び宗教書(教義書・修徳書等)を、ラテン文法は、全く系統の異なるアジア・アフリカ・南米の諸言語との最初の言語学的邂逅の記録として、「宣教に伴う言語学」という言語学史の新領域の研究対象を形成している。「宣教に伴う言語学」は、21世紀に入ってから研究の進展がめざましい若い研究分野である。

大航海時代の「宣教に伴う言語学」に関連する資料・史料は、歴史的経緯から世界各地に散在しており、研究者も、南米、アフリカ、インド、フィリピン、中国、日本と分散している。又、「宣教に伴う言語学」研究には、当時のラテン・スペイン・ポルトガル語以外に、各布教対象語の十分な知識が必要であり、これらの条件から、必然的に、国際的な共同研究が要請される。

本プロジェクトの目的の一つは、大航海時代の「宣教に伴う言語学」の国際的な共同研究のために必要なリソース、関連する文献学・言語学の研究リソースを作成・維持し、国際的共同研究に資する点にある。

日本学術振興会(JSPS)「先端学術研究人材養成事業」(2009)の一つとして、本プロジェクトの「大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のための非一極集中型研究環境の構築」プログラムが採択され、(<http://joao-roiz.jp/IRMLG/>)、これによって「宣教に伴う言語学第6回国際会議」(2010年3月16日～19日、<http://joao-roiz.jp/MLG2010/>)を開催した。これらのプログラム・国際会議の成果に基づき、今後の本プロジェクトの活動は、更に国際的に開かれたものとなるであろう。

<http://joao-roiz.jp/>

【節連結に関する通言語的研究】

2010～2012年度

代表者: 渡辺 己 所員6/共同研究員16

通言語的な比較対照研究は、単一の節(あるいは単一の節からなる単文)をもとにおこなわれることが多い。しかし、およそ自然言語であれば、実際の運用にあたっては複数の節が連続して現われる。その際の節のつながり方はさまざまで、大きくは等位的か従属的な連結が考えられる。本研究課題では、形態統語的に多様な言語を専門とする国内外の研究者を集めることにより、類型的に異なるタイプの言語がそれぞれにおいてどのように節を連結していくのかを考察し、そこに節連結に関する類型の特徴、あるいは通言語的共通点を探るものである。

さらに特に近年になり、形態統語的には従属節だと考えられるものが、自然談話のなかで主節なしで単独で現われる現象(「言いさし」、「insubordination」)が通言語的に研究されるようになった。本研究課題ではこのような現象を含め、言語の実際の運用における節連結を視野におきながら研究を進める。

なお、本研究課題は、特別経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」の活動の一環とする。

【北方諸言語の類型論的比較研究】

2010～2012年度

代表者: 呉人 徳司 所員5/共同研究員21

本研究では、北東シベリアから北米にかけて分布する諸言語(以下、北方諸言語)の様々な文法現象に関する類型論的比較研究をおこなう。人類の移動のルートにあたるこの地域は、類型・系統を異にする言語の蝟集が世界的に見ても突出した地域として注目されている。それらの言語が示す類型的多様性は、語形成手段、文法関係の標示、語順、文法範疇など、形態論から統語論へと多岐にわたる。

従来、北東アジアと北米では別個に研究が進められてきたが、これらの文法現象の中には大陸の新旧を越えた類似性を示すものもあり、両地域を総合的に捉える視点が重要である。

本研究では、以下のような研究を行なっていく。

1. 国内外の北方諸言語研究者の協力体制により、海外研究者にも協力を呼びかけ国際的な北方諸言語の類型論的研究を構築することを目指す。
2. 特別経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」とも連携し、北方諸言語の記述の前提である言語データの加工と公開に取り組む。

【インドネシア諸語の記述的研究: その多様性と類似点】

2010～2012年度

代表者: 塩原 朝子 所員2/共同研究員14

本研究は、「インドネシアの言語」の研究の進展を目的とし、以下の2つの活動を行う。

- I. 研究者が個別言語の文法記述によって得た知見を集め、インドネシア諸語に関して個別言語間の相違点/類似点を明らかにする。メインテーマは「インドネシアの言語の態」とし、各言語の記述データを元に個別言語の記述手法ならびに、類型論的、比較言語学的事柄について議論する。インドネシアの言語において文法の根幹を成す「態」に注目することによって、付随的に「情報構造の標示」「時制・相・法」なども含め、インドネシア諸語の実相が広い範囲で明らかになることが期待される。なお、参加者の関心に合わせて、短期的な「サブテーマ」も設定する予定である。
- II. 特別経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」と連携し、Iの言語記述の前提である言語データの加工と公開に関わる作業を行う。

なお、対象言語は、インドネシア国内で話されているオーストロネシア語を中心とするが、系統的特徴を共有するオーストロネシア諸語、地域的特徴を共有するパプア諸語も射程に入れる。

<http://lingdy.aacore.jp/jp/workshops-studygroups/typology-and-comparative-linguistics-of-indonesian-languages.html>

【ダイクシス表現の多様性に関する研究】

2010～2011年度

代表者: 林 徹(東京大学) 所員1/共同研究員5

指示詞、代名詞、人称や時制の標識などの空間ダイクシス、人称ダイクシス、時間ダイクシスに関する表現は、言語の基本的要素であるにもかかわらず、意味を明確に説明することが極めて困難である。その理由は、言語が発せられる状況が意味と緊密に結びついているからである。本研究課題は、性急に一般化を求めることなく、手話を含めたアジアの諸言語に見られるダイクシス表現のさまざまな用法を、定型表現など非ダイクシスの用法も含めて、できるかぎり詳細に検討し、アジアの諸言語におけるダイクシス表現の信頼できる概説を作成する。また、これと並行して、従来母語話者の内省報告に偏っていた嫌いのある言語データを多様化するために、新たな調査法を考案し試行する。

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

【漢字字体規範史研究 第二期】

2010～2012年度

代表者: 石塚 晴通(北海道大学名誉教授) 所員1/共同研究員13

漢字字体には規範がある。本プロジェクトは、その規範の歴史的転換をもたらす強い影響力を持つ文献、及びその規範を忠実に反映した文献からなる「漢字字体規範史料」を選定し、漢字字体規範の史的展望を行なう。過年度までの「漢字字体規範史研究」(2007～2009) プロジェクトで構築した「漢字字体規範データベース」HNG (<http://joao-roiz.jp/HNG/>) を研究基盤に置き、漢字字体史の科学的な編年規準を確立する事を目指し、その過程で史的・国際的検討に耐える漢字字体概念の一般化と文書化を行なう。又、HNGデータベースの拡張にも努める。(HNGデータベースは、「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」であるとして第一回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」を受賞している)。

メンバーには、文献学だけでなく、工学(光学的手法による非破壊文書年代検査法)専門家を含み、唐代写本・奈良朝写経を多数所蔵する正倉院事務所所長、京都国立博物館学芸部副部長、海外からは大英図書館・フランス国立図書館の各敦煌コレクション責任者を(別途科研費により招いて)加え、編年規準の客観化・国際化に十分留意したプロジェクトとする。

<http://joao-roiz.jp/HNG/>

【契丹語・契丹文字研究の新展開】

2010～2012年度

代表者: 松川 節(大谷大学) 所員1/共同研究員8

10世紀、現中国北部～モンゴリア地域に成立した契丹(遼)では、漢語とともにモンゴル語系の「契丹語」が主要言語として通用し、「大字」と「小字」という異なるタイプの文字体系を用いて記されていた。これらは石刻史料の形態で現存するが、資料数は僅少であり、内容的にも墓誌に限られる等の偏重もあり、結果的に未だ契丹語および文字の解明には到っていない。

また従来の研究においては、契丹文字資料の研究は歴史学的見地からの研究が主流を占め、言語学的見地からの研究は充分に尽くされているとは言い難い。本プロジェクトは、契丹文字資料について、最新の言語学的研究をもとに研究・分析を行い、新たな契丹語・文字研究を目指す。

3年という時限を設定し、段階的に研究成果を示す。具体的には契丹文字碑文の検討を通じて、1)資料データの収集、2)個々の契丹文字の画像抽出、などを行い、研究者・一般が活用できる形で公開する。その上で、3)主として言語学的な視座からの研究を行い、その成果を論集等にまとめて報告・公開することを目標とする。

<http://liaojinxixia.web.fc2.com/>

【アフリカ諸語の情報構造と言語形式の類型論的研究】

2011～2013年度

代表者: 稗田 乃 所員1/共同研究員12

アフリカ諸語の情報構造と言語形式の関係を探るための研究組織を形成する。アフリカ諸語の情報構造と言語形式の関係を研究する国際ネットワークの構築をめざす。同時にフンボルト大学において、プロジェクトと同様の「アフリカ諸語における情報構造と言語形式の関係について」の研究プロジェクトを、本プロジェクトとの連携を模索して申請した。近年、注目されている情報構造と言語形式のあいだに存在する関係について、アフリカ諸語の資料から研究する。共同利用・共同研究課題における研究テーマは、以下のものである。アフリカで話されている言語においても、情報構造は、プラハ学派以来の普遍的なものであるか。アフリカ諸語が情報構造を表現するのに、どのような音韻論的、形態論的、統語論的、言語形式を用いているのか。情報構造と言語形式のあいだに存在する関係を類型論的に分析すると、なんらかの類型論的特徴が見つかるか。観察される類型論的特徴に地理的関係が存在するか。以上のような研究テーマにしたがって、研究組織を形成し、国際研究ネットワークの構築を模索する。

■人類学系

【人類社会の進化史的基盤研究(2)】

2009～2011年度

代表者: 河合 香吏 所員5/共同研究員18

人類は生物分類学的には霊長目に属し、進化史的にはごく最近(約600～700万年前)までチンパンジーやビゴミーチンパンジー(ボノボ)といった大型類人猿とともに進化の過程を歩んできた。人類の社会性(sociality)の基盤はこれらヒト以外の霊長類との連続性と非連続性を検討することによってこそ、より深く明解な人類学的理解が可能となろう。このプロジェクトは、長期的プロジェクトの第1弾として2005～2008年度におこなわれた「人類社会の進化史的基盤研究(1)」におけるテーマ「集団」に続く第2弾として「制度」をとりあげるものである。ここでは、「制度は言語のうえに成立する」という一般に当然と思われている命題にたいして、音声言語をもたないヒト以外の霊長類に「社会」を認め、社会構造論や家族起原論などを展開してきた霊長類学の知見や理論によってこれを相対化する。そのいっぽうで、当該社会の成員の行為・行動のなかに制度の前駆的なありようをみとめ、言語を前提としない制度の可能性とその進化史的基盤を追究する。

<http://human-evo.aacore.jp/>

【多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究】

2011～2013年度

代表者: 津田 浩司 所員2/共同研究員7

本研究は、今日主に東・東南アジアの各地で、ある一群の人々がどのように「華人であること」を生き、またどのような広がりをもって彼らなりの「華人世界」を思い描き、新たな関係性を構築しようとしているかを、多角的に明らかにすることを目的としている。言うまでもなく「華人であること」は、それぞれの地で歴史性を帯びた文脈依存的なものであり、また近年その「華人」たちを取り巻く環境も、東南アジアをはじめとする各国での政治状況の変化、国際地政学上の中国のプレゼンスの高まり、あるいはグローバル化のさらなる進展などを受け、大きく変わりつつある。本研究ではこうした事態を踏まえ、様々な出自や背景、文化要素を身に帯びた人々が、現在どのようなことを背景に、どのような「記憶」を(再)生産し、またそれによってどのような「我々の広がり」を想像し、かつ現実には立ち上げようとしているか、そしてそれが当事者もしくは外部者によってどのような意味で「華人」であると認識されるのか、その過程を具体的事例に即しつつ多元的に明らかにする。この作業を通じ、何らかの社会事象を学術的に「華人」と一元的に表象することの意義と限界を検討する。

【「シングル」と家族一縁(えにし)の人類学的研究】

2010～2012年度

代表者: 椎野 若菜 所員2/共同研究員21

本研究は「シングル」とされる人間の存在とその生き方について、それと相反し強化しあうかのような存在である、当該社会における家族親族、またくわえて個々人に少なからず影響を及ぼす国家の存在との関係性を念頭に、縁(えにし)という言葉を手がかりに社会-文化人類学(以下、人類学と記す)の立場から追究するものである。

現代社会における個人の生き方は多様化してきている。出稼ぎ、単身赴任、留学、宗教的理由、また被災、少子高齢化といった要因で頻繁に人は移動し分散し、こうした社会的環境の変化によってライフスタイルや人々との関係性も大きく変化している。いったん崩壊したかにみえた近代家族だが、それをモデルにした擬似的な「家族的」なものを求め、近年、人々がつながりだしている事象がみられる。以上のような現代の事象をもとに、本研究はアジア・アフリカを中心に家族、社会の実態と、それらによって創出されたとも考えられる「シングル」の生きる戦術を明らかにする。さらにこうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念、シングルの存在の対として位置づけられがちな理想像として生産される家族(像)について、人類学の立場から検討する。

【東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学—結婚(離婚)移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ—】

2010～2012年度

代表者: 石井 香世子(名古屋商科大学) 所員2/共同研究員13

本共同研究課題では、東・東南アジア各地(日本・中国・韓国・香港・台湾・フィリピン・ベトナム・タイ・マレーシア・インドネシア)をフィールドとする内外の研究者を集め、東・東南アジア地域に近年発達しつつある、越境結婚/離婚移住ネットワークの多方向性・重層性・環流性について分析する。これまで人類学の分野では、東・東南アジア地域を対象とした移動研究・越境移動研究が数多く蓄積されてきた。しかし一方で、今日の越境移動の重要な一角を占める結婚移住に焦点を当て、その移動ネットワークの多方向性・重層性・環流性に注目して分析した研究は未だ少ない。ましてや、国際離婚にともなう離婚移住に着目した研究は皆無に近い。本研究ではこれらの越境移動事例に焦点を当てて研究することで、人類学の移動・移民研究分野において新たな知見を発見することが期待される。

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

【社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して】

2010～2012年度

代表者: 増田 研(長崎大学) 所員1/共同研究員14

本研究課題は、文化人類学に隣接した今日的な実践的分野である社会開発における研究活動に必要とされるフィールドワークの技術的融合を目的とする。具体的には、(1)参与観察とインタビュー調査を中心とする文化人類学の方法論を、広い意味での社会調査のなかに適切に位置づける、(2)疫学・統計といった数量的調査および空間情報システム(GIS)によるアウトカムを、質的調査の成果と組み合わせる方法を模索する、(3)アジア・アフリカにおける人口動態・動態調査(Demographic Surveillance System)のアウトカムに対しての検討を適して技術的融合の可能性を探る、および(4)これらの技術を参加型開発の実践に応用する手法を見いだす、以上の4点を活動内容とする。社会開発分野においては人類学と同様に「フィールドワーク」を必要とするとはいえ、Rapid Ethnographic Method (Rapid Appraisal)のような、時間をかけずに手っ取り早く誠査を済ませる方法論が提唱されている。しかし我々は、このような「目的に向かって単線的に進む調査手法」からそぎ落とされてしまう「ノイズ」にも注目し、従来型の地域の文脈に根ざした人類学的手法、「問題をめぐって発見をあぶり出していく螺旋的思考運動」を、多様な分野における調査・分析方法と具体的データを事例に吟味し議論しつつ、新たなフィールドワークの方法論へと結びつけたいと考えている。こうした取り組みは、人類学における開発の分野だけでなく、国際保健分野などにおいて、いわゆる質的調査への需要が高まっているなかで、大きな意義を持つであろう。

http://lalombe.icurus.jp/yugo_ken/

■歴史学・地域研究系

【インドネシア在地文書研究プロジェクト】

2009～2011年度

代表者: 宮崎 恒二 所員2/共同研究員6

本プロジェクトは、これまで日本でまったく用いられてこなかったインドネシア諸語による在地文書に焦点を当て、その全体像を把握するとともに個々の写本ないし写本群のコーパスを構築し、それらを用いたインドネシア諸地域の歴史、文化、社会、言語の諸側面の解明を目指す。また、これらの在地固有言語による文書を資料として用い、かつその利用方法を確立することによって、植民地行政文書や口頭伝承に依拠した研究とは異なり、現地語による文字表象を通じた、新たな視点の開拓を目指す。さらに、個別文化の研究にとどまらず、広く文字文化一般、そして口承伝統と文字文化の関係についての考察も進める。三年間のプロジェクト期間を設け、第一段階として、インドネシア諸語による写本の全体像を解明すると共に、ジャワ語・ジャワ文字による写本を研究対象として取り上げる。

【歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化】

2010～2012年度

代表者: 石川 博樹 所員2/共同研究員15

サハラ以南アフリカ諸国の経済停滞が国際的な懸案となっている現在、大多数の国々の基幹産業である農業についての研究を一層深化させることが国際的に求められている。これまで我が国におけるサハラ以南アフリカ農業研究は、主に農学、人類学、経済学の研究者によって実施され多くの成果をあげてきた。本研究課題においては、これらの学問分野の研究者に歴史学研究者も加わり、サハラ以南アフリカ諸地域の農業と文化の関連について歴史的観点からの研究を共同で実施する。特に社会的・文化的に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず未解明の課題が少なくない主食作物に関わる史的諸問題を広範に検討することによって、サハラ以南アフリカ農業研究の新たな研究領域の開拓を試みる。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/agriculture2010/>

【中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存】

2010～2012年度

代表者：黒木 英充 所員5/共同研究員10

レバノン、シリア、トルコ、イランの主要都市を対象として、近現代における都市空間の拡大を人間移動の結果ととらえ、そこでいかなる多民族・多宗派関係が形成されてきたかを明らかにするとともに、その共存関係が現代の政治・社会運動をどのように方向付けているかを解明する。各都市に関してイスラム・非イスラム間の、また多民族間の共存関係を分析することは、広く地球社会全体のイスラム・非イスラム関係、さらには多民族・多宗派関係一般の望ましいあり方を構想するための有効な知見を提供することになる。歴史学、地理学、人類学、政治学、都市計画学といった多様な領域を専門とする研究者を国際的に組織し、バイルートの「中東研究日本センター」を拠点として調査研究を実施する。研究成果も同海外拠点を利用して国際的に発信する。また、サブプロジェクトとして「中東都市多層ベースマップシステム」を推進し、現在と過去の地図情報をウェブ上で重ね合わせて研究者が情報を書き込み、共有・公開する態勢を整える。

【中国古代簡牘の横断領域的研究】

2011～2013年度

代表者：陶安あんど 所員1/共同研究員8

簡牘とは、木や竹で作られた「ふだ」のことをいうが、それは、中国では3世紀頃まで広く用いられていた書写材料の一つであると同時に、その形態に様々な意味が込められたモノでもある。例えば現在カードにICチップが埋め込まれるのと同様に、「符・券」という簡牘には、信憑性を確保するため、記載内容に合致する特殊な刻みが施され、またパスワードのように、文書に「封検」という特殊な形状の簡牘を組み合わせ内容漏洩を防ぐ工夫などもなされていた。

こうしたモノとしての簡牘は、複雑で長いライフサイクルを有する。作成・作成目的に沿った利用と再利用から目的外の再利用と廃棄に至るまで、簡牘は時に形状と機能を変化させ時空を移動しつつ、社会生活の様々な局面に立ち会った。そのため、簡牘には当時の豊富な情報が刻み込まれている。本研究課題は、簡牘の文字情報の正確な解読を基礎に据えつつ、中国古代の社会生活を語る証人としての簡牘に新たな生命を吹き込んで、新しい簡牘学の構築を目指すものである。

【東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—】

2011～2013年度

代表者：クリスチャン・ダニエルス 所員2/共同研究員20

これまでタイ文化圏の研究では、周辺のミャンマー・シャム・ベトナムの国家(前近代・近代国家を含む)からの影響が強調されてきた。中国については、雲南省・広西省との関係のみが考慮されてきた。民族・文化・言語の研究においては、東南アジア大陸部という地域枠組のなかで検証されてきた傾向がある。タイ文化圏は北において中華世界、チベット・モンゴル世界とつながっているが、また南においてベンガル湾の海洋世界と連続している。

本研究課題では、この南北軸を中心とする広域的視点から、タイ文化圏の歴史・文化・言語を分析する。南と北に位置する民族と政権との交流・接触の中で、タイ文化圏の歴史・文化・言語がどのように形成され変容していったかを明らかにすることが主たる目的である。隣接するチベット・モンゴル及び中華の諸世界で起こった変化がタイ文化圏に対してどのような影響を与えたかを考察する。タイ文化圏を事例としながら、東アジア・東南アジア大陸における、文化圏形成のプロセスを検証する。

【移民／難民のシティズンシップ—国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践—】

2011～2013年度

代表者：錦田 愛子 所員3/共同研究員12

国民国家を構成単位とする近代以降の世界において、移民、難民の存在は、滞在国における国籍の付与、一定限度における市民権の容認、人道的見地からの人権保障などの対象として、これまで主に論じられてきた。しかし超国家レベルの政体や交渉枠組みの拡大、また越境移動の活発化は、こうした人の動きを各国単位で対処されるべき個別の派生素素と捉えるだけでは不十分であることを示している。本課題では、国民という資格と、それに付随するものと考えられてきたシティズンシップを、切り離して考えることにより、現在実際に展開している複合的な市民、居住のあり方を解き明かしていく。国籍なきシティズンシップは可能か、実際の取得事例や当該国での位置づけ、シティズンシップとナショナル・アイデンティティとの関係、移民／難民の包摂と排除をめぐるシティズンシップが及ぼす影響などについて、制度と実践、理論と政策等のさまざまな側面から明らかにしていく。

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

【アフリカ史叙述の方法にかんする研究】

2011～2013年度

代表者：永原 陽子 所員3/共同研究員9

本課題では、世界史的な視野にたった新しいアフリカ史叙述の可能性を追究する。従来のアフリカ史叙述の問題点として、無文字社会論の誤解により史料研究が疎かにされてきたこと、サハラ以南と以北(あるいはイスラーム圏)とを切り離す地域区分により大陸全体の歴史的特性をとらえる視点が弱かったこと、植民地化以前の中東/西アジア・インド洋世界、大西洋世界、ヨーロッパ等との歴史的関係が十分にとらえられずにきたこと、植民地時代を基準とした時代区分が行われてきたこと、それらのいずれの問題系においてもジェンダーの視点が軽視されてきたこと、などを挙げることができる。本課題では、これら諸点について検討を加え、文字史料・非文字史料双方を踏まえてアフリカ史像を構築し、アフリカ史と世界史とを有機的に結びつけて理解するために必要な視点と方法を提示することを目指す。

【近世イスラーム国家と多元的社会】

2011～2013年度

代表者：近藤 信彰 所員3/共同研究員20

16～18世紀にイスラーム圏を支配したオスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝という大帝国の統治体制と統治技術を前の時代および同時代の諸王朝のそれと比較しつつ、文書史料等の原史料に基づいて比較検討し、その特質を明らかにするのが、本研究課題の目的である。これらの帝国の、「柔らかな専制」などともよばれる統治体制は、多元的社会を巧みに扱い、一定の平和と繁栄をもたらした。現在、文書史料等さまざまな新史料により、これらの国家の統治体制・統治技術に関する研究は飛躍的に進みつつある。しかしながら、個人では新史料や個別研究を把握するのも困難になりつつある。最新の成果に基づきながら、共同で比較研究を行うことで、これらの国家がいかに多元的社会を統治したかを究明し、また、近代以降政治的安定をこれらの地域が失った理由を描き出す。

http://meis2.aacore.jp/jr_islamic_states/

【東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究】

2011～2013年度

代表者：床呂 郁哉 所員6/共同研究員14

本研究の研究目的としては、まず第一に東南アジアの多文化的状況の解明を目指している。より具体的には、文化的な多様性を特徴とする東南アジアにおいて、ムスリムと非ムスリムはどのような関係性を保っているのか?、また両者が相互交渉するなかで互いの文化・社会的アイデンティティをどのように構築しているのか?、さらには東南アジア域内の多文化状況が政治や経済、司法、教育などの社会的・公共的領域へもつ影響や含意は何か?、といった点について実証的に解明することを目指す。

ネットワークの構築



海外学術調査総括班

海外学術調査総括班(The Overseas Scientific Research Coordination Team: OSC)は、AA研所員が培ってきた人文社会系フィールドワークの諸経験をふまえて、フィールドサイエンスの構築可能性の探究と超域的研究ネットワークの確立をめざす事業です。

1975(昭和50)年以来、人文社会系・理工系・医学系・農学系・生命科学系など、さまざまな分野で海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織間、そして、研究者・研究組織と文部科学省や日本学術振興会との間の情報交換や連絡調整に従事してきました。2005(平成17)年度からは、事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センター内に置き、活動内容のさらなる拡充につとめています。

本事業の主な活動は次の2つです。

1. 海外学術調査の研究組織の代表者を中心に、広く全国の研究者を集めた「海外学術調査フォーラム」の開催
2. フィールドサイエンスの構築可能性をさぐる多彩な企画の継続的な開催・運営

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/>



Fieldnet



Fieldnetは、フィールドワークを行う研究者が文系／理系、また専門分野や所属の壁を越えて参加し、個々のフィールドや研究上の情報などを提供し合うことで、個別的な<知>を結び、それにより新たな<知>を構築するためのネットワークです。

具体的には、参加者がオンラインで各フィールドの情報や研究紹介をアップし、研究者間のコミュニケーションを生むSNS機能を備えたウェブサイトを立ち上げました。また、オンラインで得たつながりを、オフラインのワークショップや研究会やラウンジといった、互いの各専門の得意とするスキルや情報を交わす機会へと発展させていきます。このように、オンラインとオフラインを併用することによって、異分野から得られた知的刺激を、個人研究へとフィードバックさせ、さらには新たな学際的共同研究に活かし、フィールドサイエンスの可能性に挑むことを目指しています。

自分の研究をアピールする場であると同時に、世界中の地域情報を送受信する場であるFieldnetは、フィールドワーカーの異なる<知>をつなげるネットワークです。

<http://fieldnet.aacore.jp/>



大型プロジェクト



言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy) LingDy 「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」

世界に7,000弱あるとされる人間の言語は、人間の認知能力と社会活動が生み出す伝え合いの体系がいかに多様な形を取りうるかを見せてくれます。近年、特に研究未開発の少数言語からのデータが徐々に蓄積されてくるとともに、人間言語に関する一般理論の構築を目指す言語研究の中でも言語の構造的多様性の幅と深さが強く意識されるようになってきました。また、欧米主導の急激な経済グローバル化の中で伝統的言語の大量消滅が世界的に進む今日、言語・文化の多様性の保護・研究を継続的に保障する基盤を構築することが国際的な緊急課題となっています。

本プロジェクトは、こうした学術的、社会的要請に応えるため、文部科学省特別経費を受け2008(平成20)年度より5カ年計画でスタートしました。研究未開発言語のドキュメンテーション研究(語彙、文法、テキスト資料、及び文化・社会的情報の収集を通した多面的な記録と研究)の活性化・体系化と、

構造的多様性と歴史的変化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の構築を、継続的な国際連携体制の下で進めることを目的としています。プロジェクトを支える連携体制は、アジア・アフリカ言語文化研究所を国内とりまとめ機関とし、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学院とドイツのマックス・プランク進化人類学研究所を海外連携拠点として、組まれています。

このプロジェクトで取り組んでいる活動には以下のようなものが含まれます：

- ・言語多様性に関する先端的研究の推進
- ・国際的共同研究インフラの構築と研究交流活性化
- ・研究資源共同利用体制の構築
- ・記述言語学に携わる若手研究者のネットワーク構築

<http://lingdy.aacore.jp/>



既形成拠点

アジア書字コーパス拠点(GICAS)



GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の1つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

<http://www.gicas.jp/>

中東イスラーム研究拠点(MEIS)



MEIS「中東イスラーム研究拠点」は、本研究所在2005(平成17)年度から2009(平成21)年度まで文部科学省特別教育研究経費(拠点形成)を得て実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies)を通じて形成された中東およびイスラームの研究拠点です。

この拠点の前身となった中東イスラーム研究教育プロジェクトは、2006(平成18)年2月にレバノンのバイルート拠点「中東研究日本センター(JaCMES)」、2008(平成20)年3月にはマレーシアのコタキナバル拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」を開設し、それぞれの運営にあたる一方、中東・イスラームに関する複数の共同研究を展開し、国内外の研究者を招いた不定期の研究会やシンポジウムと合わせて、日本における中東研究、イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に寄与してきました。

また、全国の大学院生や博士課程満期修了者を対象とした中東・イスラーム研究セミナー、同教育セミナーおよびアラビア語、ペルシア語、ジャワ語の文献学・文書学セミナー、さらには若手のみならず全国の研究者すべてを対象としたオスマン文書セミナーなどを通して、次世代を担う若手研究者の育成にも努力してきました。

2010(平成22)年4月に発足した本研究拠点は、同時にスタートした基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」や、中東研究日本センター、コタキナバル・リエゾンオフィスの維持・運営にあたるフィールドサイエンス研究企画センターと密接に連携・協力しながら、わが国の中東研究、イスラーム研究のさらなる振興・発展を目指しています。

インドネシア、中ジャワ州ルンバン：行商人の籠の中 撮影：津田浩司



研究資源

知の拡大を支える
資料と情報のベース



アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源

IRC プロジェクト

「アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流の推進」というIRC(情報資源利用研究センター)の設置目的に合致した研究を本研究所内で毎年度募集し、審査を経て「IRCプロジェクト」として採択しています。

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/projects/>

オンライン研究資源

AA研の共同研究や、スタッフ個人の研究の成果として、デジタル化された辞書・データベースなどのコンテンツをオンラインで公開しています。これは、AA研が国内外の研究者向けに研究資料や成果を公開することを目的としているものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/on-line/>

資料展示(企画展・オンライン展示等)

AA研スタッフが収集したアジア・アフリカの言語と文化に関する貴重な資料や、それらの資料をもとに行われた研究の成果を広く一般に公開するために企画展を実施しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/event/exhibitions/>

出版物



出版物

本研究所では、査読付きの学術誌、共同研究および個人研究を通じたさまざまな研究成果、そして、言語研修や辞典編集などの事業の成果を数多く出版して公開しています。研究機関あるいは研究者の方々には多くのものを無償で頒布しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/>

『アジア・アフリカ言語文化研究』 *Journal of Asian and African Studies* (年2回発行)：国内外で高い評価を得ているAA研発行の学術雑誌です。所外の研究者を含む編集専門委員会(p.6)が編集に携わり、国内および海外から投稿され査読を経た、言語学・歴史学・文化人類学に関する高水準の論文を掲載しています。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 *Asian and African Languages and Linguistics* (年1回発行)：アジア・アフリカ諸言語の記述研究の成果を発信するために2006(平成18)

年に創刊された査読付き学術雑誌です。一次データに基盤を置いた研究成果の共有により言語の構造的多様性を明らかにし、その記述と理論両面に貢献することを目的としています。「アジア・アフリカ言語文化叢書」：AA研を代表する成果シリーズです。所内外の研究者によるアジア・アフリカの言語文化についての論考を査読を経て出版しています。

「地域・文化研究」：AA研が主催する共同研究プロジェクトの研究報告が中心となっています。

「言語研修テキスト」：AA研で毎年行われる言語研修で用いるために、担当講師が独自に作成したテキストです。

「アジア・アフリカ基礎語彙集」：基礎的な語彙集から辞書まで、多岐にわたるフィールド語彙調査の成果を査読を経て出版しています。

『フィールドプラス』(年2回発行)：2009(平成21)年に創刊された雑誌です。AA研スタッフ・共同研究員を始め、人文科学以外の研究者も執筆陣に迎え、世界のあらゆる場所をフィールド(調査地)とする研究者たちの新しい発想・取り組みやその過程で得られた経験を、様々な角度から紹介します。

海外研究拠点



国際的な知の交流

海外研究拠点

本研究所は、海外の研究者との連携と交流をより活発に
おこない、国際的な共同研究を展開していくために、ペイ
ルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)の2箇所に
海外研究拠点を設置しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/satellite/>

中東研究日本センター (JaCMES)



中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ペイル
ートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12
月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平
成18)年2月1日に開所式を行いました。

本センターは、AA研の共同利用・共同研究拠点としての機
能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

1. 国際共同研究の推進

共同利用・共同研究課題を海外の研究者とともにJaCMES
で直接実施します。また、常駐の特任研究員を派遣して、長
期の現地調査に専念させています。

2. 若手研究者報告会「日本の中東・イスラーム研究の最前線」

日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が
最新の研究報告を行い、レバノンを始めとする中東現地の
研究者と直接交流する機会を提供します。

3. 日本・中東関係講演会

日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを
専門とする研究者を講演のために派遣し、交流の歴史と現
状を紹介する機会を設けます。

4. ペイルート学術情報の紹介

ペイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の
情報を収集し、ウェブサイトで公開して紹介しています。

所在地:

Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir
Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON
Phone/Fax: +961-1-975851

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政
府により設立されたサバ開発研究所(The Institute for
Development Studies, Sabah)の全面的な協力により、AA
研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学
術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設
置されました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなど
の東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあ
たり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界
の動態の解明にとって最適な地の利を生かし、マレーシア、日
本および関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究
プログラムを推進します。

所在地:

Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS
Institute for Development Studies (IDS), c/o, IDS Lot
2-5, Wisma Setia, Off Jalan Pintas, Pinampang, Kota
Kinabalu, Sabah, MALAYSIA
Phone: +60-88-246116, 246167, 242871
Fax: +60-88-234707

音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、アナログ音声信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的編集機能や、記録・再生機能も有しています。さらに、リアルタイムなスペクトログラム分析・ピッチ分析を行うための専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々

な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集した言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた高性能のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/phonetic-lab/>



文献資料コレクション



文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究にとって重要資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ3千余に達し、ほかに古文書、地図、写真、またビデオやCD-ROM等も所蔵しています。

AA研のみがもつ貴重な資料も少なくありません。たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、彼地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等)は、研究所ウェブサイトで公開されています。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌」(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世

紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

なお、故大塚和夫氏の人類学と中東・イスラーム関係の蔵書を大塚文庫として公開すべく、現在準備中です。

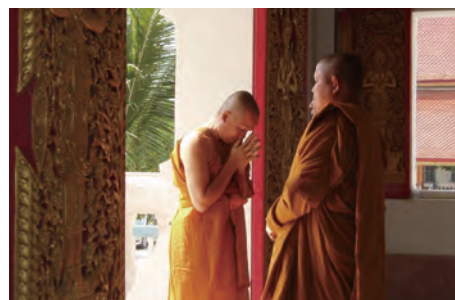
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/library/>

フィリピン、ミンダナオ島：マドラサ(イスラーム学校) 撮影：床呂郁哉



研究者養成

知識と経験の
終わりがリレーのために



研究者養成のための事業

本研究所ではアジア・アフリカを中心とする研究活動を新しく展開させ、後世に引き継ぐ次世代研究者を養成するために、3つの側面から機会を提供しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

【学ぶ・身につける】

～言語運用能力の習得、研究スキルの習得

特定の言語の短期集中型習得や、地域やトピックを絞り込み深く掘り下げた講義・討論をする機会を提供する企画を展開しています。

【磨く・鍛える】

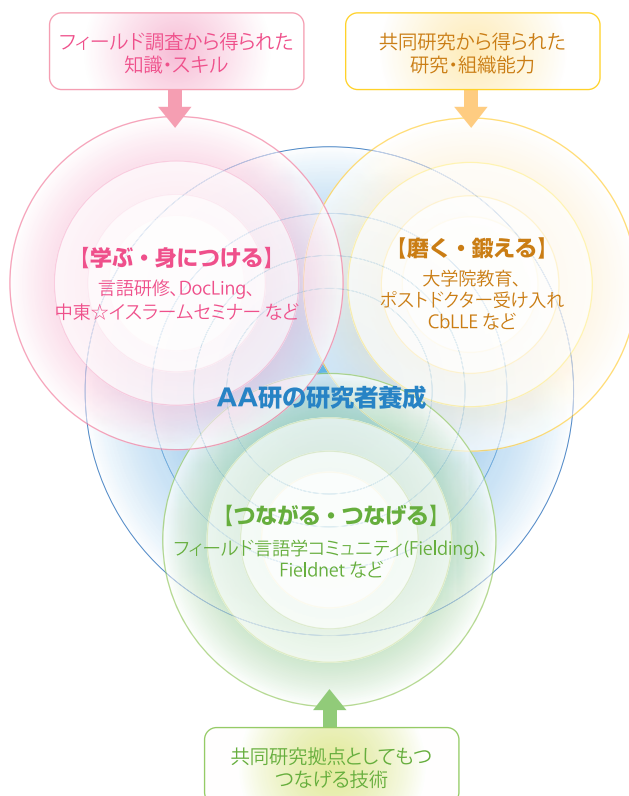
～研究を実践的に展開する能力の鍛錬、共同研究を組織する能力の鍛錬

大学システムの中であって、従来型の大学院教育を超えた個別研究・共同研究の実践的トレーニングを積むための指導、機会を提供しています。

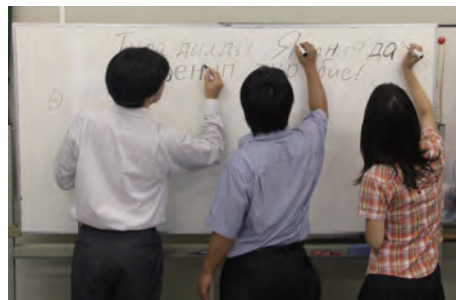
【つながる・つなげる】

～研究者、研究活動を有機的につなげる仕組み・インフラの整備・提供

狭い専門分野や所属学科などの枠を越えて若手研究者をつなぎ、アジア・アフリカに関する共同研究を将来に向けて活性化し、研究の新展開の可能性を広げるための研究者コミュニティ作りの活動をしています。



言語研修



言語研修

本研究所では毎年夏、専門研究者と母語話者を講師陣に迎え、アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者を対象とした短期集中プログラムによる言語研修を実施しています。言語研修に参加することで、現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や調査の手法など、専門的知識も学ぶことができます。研修言語は、おもにアジア・アフリカ地域で話される少数民族の言語を含めた様々な言語を取り上げています。毎年、東京会場で2言語、大阪会場で1言語の研修を実施しています。

これまでに実施された言語の数は、のべ117言語、修了者数のべ1118名にのぼっています。修了者の中からは、大学や研究機関の職につき、アジア・アフリカ地域の専門家としての道を歩んでいく方々が輩出しています。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深いAA研内外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、実

施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。すべての研修において講師陣が独自に教材を開発していることも、AA研の言語研修の大きな特徴のひとつです。

関西会場の研修のうち大阪で実施されるものは、大阪大学世界言語研究センターの協力を得て行われます。研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了証書が授与されます。

2006(平成18)年度より東京外国語大学外国語学部および大学院の開講科目となりました。

2010(平成22)年度は、アムド・チベット語、スワヒリ語(東京会場)、スィンディー語(大阪会場)の講座を開講しました。

2011(平成23)年度は、シベ語、アムハラ語(東京会場)、客家語(大阪会場)の講座を開講予定です。

現在、これまでに作成されてきた教材のウェブ上での公開も進めており、完成したものから順次公開しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/>

フィールド言語学ワークショップ



フィールド言語学ワークショップ

AA研では、特に大学院生・ポストドクターなどの若手研究者に向けたフィールド言語学に関するさまざまなワークショップをおこなっています。

これらのワークショップは、特に研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に関するもので、日本の大学では通常、授業としておこなわれていないものです。そのような研究者養成の一端を担うことは、AA研の重要な役割のひとつでもあります。

ほとんどのフィールド言語学ワークショップでは、参加者がそれぞれ自分がフィールド調査を通して得た言語データを持参することが求められます。ワークショップの講師が助言するばかりではなく、参加者同士がさまざまな経験を共有すること

によって、お互いからも学ぶ場となっています。

フィールド言語学ワークショップには、大きく分けて以下の3つのシリーズがあります。

Documentary Linguistics Workshop：毎年実施される5日間に亘る短期集中ワークショップと、それに関連するワークショップです。言語ドキュメンテーションに関するさまざまなテーマを扱います。

文法研究ワークショップ：フィールド調査で得た言語データに現われる、さまざまな文法事象に関するワークショップのシリーズです。

テクニカル・ワークショップ：フィールドで得た言語データの管理や加工に関する技術的なワークショップのシリーズです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling-ws/>

ことばを記録する



中東・イスラーム関連セミナー

中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー

本セミナーは、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している研修事業です。「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招へい講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームについて専攻する大学院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専攻としない院生も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通じた交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。博士論文構想のヒントを得たり、異なる研究分野・地域の研究者との意見交換から知識を拡充したりすることが期待されます。年1回の「教育セミナー」とは異なり、少人数で行われる「研究セミナー」は年に2回開催されます。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している院生には、単位履修申請科目となっています。
http://meis2.aacore.jp/meis_research_seminar/
http://meis2.aacore.jp/meis_educational_seminar/

オスマン文書セミナー

オスマン朝の文書・帳簿を古文書学・アーカイブズ学的視点から学ぶ演習形式のセミナーです。人間文化研究機構(NIHU)プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点との共催で、年に1回、2日間にわたって開催しています。

<http://meis2.aacore.jp/ottoman/>

ベイルート若手研究者報告会

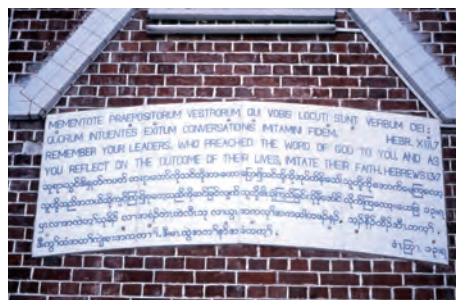
中東☆イスラーム研究セミナー、教育セミナーと同じく、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。国籍を問わず、日本において中東に関連する人文・社会科学研究(地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学など)を専攻している若手研究者の最新の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く知っていただくとともに、専門家同士の密度の高い議論の場を提供することを目的としています。

公募によって選考され、中東現地に派遣される若手研究者は、英語による30分間の研究報告を行い、その後15分間、開催地や近隣の中東諸国あるいは欧米から招聘したコメンテータを含む参加者との間で質疑応答を行います。本報告会は、2006(平成18)年度はイスタンブールのボアジチ大学、2007(平成19)年度はベイルートのクラウン・プラザ・ホテルで開催しましたが、2008(平成20)年度からはベイルートにおける研究拠点「中東・イスラーム研究日本センター」を会場とし、「日本における中東・イスラーム研究の最前線」Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: the State of the Artというタイトルのもとに開催しています。

http://meis2.aacore.jp/meis_research_seminar/beirut-semi/

コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)

フィールド・コーパス・教育



コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)

「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(Corpus-based Linguistics and Language Education: CbLLE)は、東京外国語大学大学院総合国際学研究院とAA研との連携による「グローバルCOE」(GCOE)プログラムで、2007(平成19)年度から5年間の予定で実施されています。

ここでいう「コーパス」とは、言語資料に発音・文法・方言・文体など分析に必要な情報(タグ)を加えて構造化したデータの集合体を指し、「コーパスに基づく言語学」とは、自然言語処理を中心とするコーパス言語学より広く、「コーパスデータに基づいた実証的、経験主義的な言語研究」を意味します。

CbLLEでは、「フィールドからコーパス構築へ、さらに教室での応用へ」をスローガンとして、フィールドでの一次資料収集、デジタル化、コーパス構築、コーパスの言語学的な分析から言語教育への応用を一貫したプロセスと捉え、そのための研究、教育、開発環境の充実を目指します。

この目標を達成するために、次の3つの班を設置しています。

- ・フィールド言語学班：記述研究が十分進んでいない言語を記述し、コーパスの構造に指針を与えるような研究を行います。
 - ・コーパス言語学班：言語資料のデジタル化が未発達な言語を対象に、コーパスの構築と、機械可読辞書(MRD)など言語資料を扱うのに不可欠なツールの開発に資する研究を行います。
 - ・言語情報学班：資料のデジタル化が十分進んだ言語を対象に、分析ツールの開発、機能別コーパスの構築、コーパスを利用した言語教育法や教材の開発などの応用研究を行います。
- 研究の成果をもとに、3つの分野の手法をバランス良く習得した人材の育成を行うことも、CbLLEの主要な目的の1つです。そのために、次のような教育プログラムを実施しています。
- ・主に博士後期課程の大学院生を対象に研究プロジェクトを公募し、調査やコーパス構築・利用の経験を積ませます。
 - ・3つの分野の第一線の研究者と大学院生が共同で講演・研究発表を行います。
 - ・国内外の学会における若手研究者の研究発表を支援します。

<http://cblle.tufs.ac.jp/>

Fieldling フィールド言語学コミュニティ



Fieldling フィールド言語学コミュニティ

AA研は、「フィールドリング(Fieldling)」という若手記述言語研究者のコミュニティを支えています。このコミュニティは所属研究室の枠を越えた交流・協力を促進する目的で2005(平成17)年にAA研を拠点として活動を開始しました。

フィールド言語学の様々な分野に関して、フィールドリングのメンバーから寄せられる意見・要望に応える形で幅広い内容にわたって研究支援企画を実施しています。このように、FieldlingはAA研が若手研究者コミュニティにおけるニーズによりよく応えるための仕組みとして機能しています。

主な活動には、

1. 各メンバーが研究対象の言語データを持ち寄り、具体的な

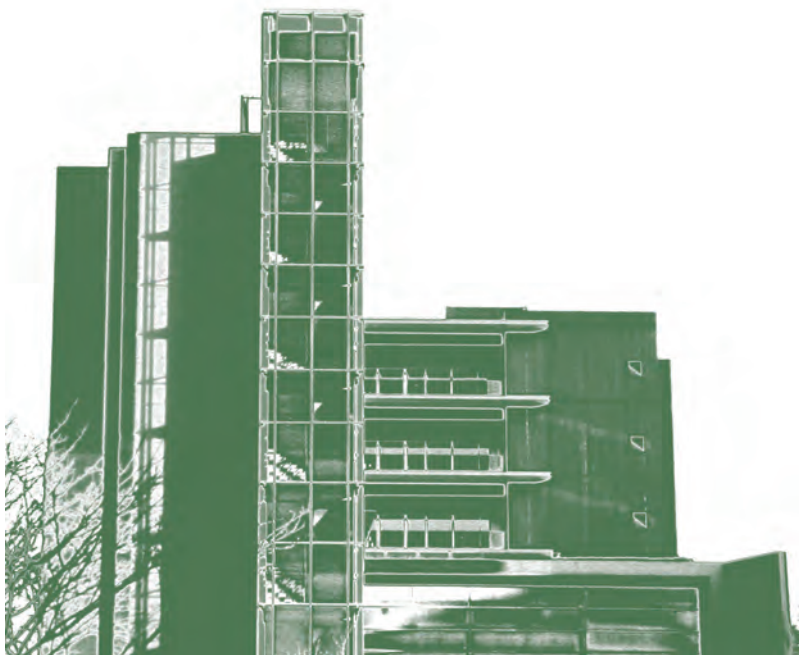
トピックに絞って議論する研究会

2. 分析のスキルアップを目的としたワークショップ
3. 現地調査で得た資料や研究成果の刊行
4. フィールドワーカー同士が情報・知識を交換できる記述言語研究コミュニティ・ウェブサイトの構築と運営
5. 言語の記述的研究について広く理解してもらうための一般向けウェブサイトの運営、などがあります。

■『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』：収集したデータをもとに、各メンバーが専門としている言語を、概略、音声・音韻、形態論、文の構造、テキスト資料という項目に分け、1言語につき30ページ程度でまとめました。現在和文編2巻、英文編1巻が刊行されています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling-ws/>

持ち寄り、分け合い、育つ



■ロゴマークについて…ラテンアルファベットのAを二つ並べたように見えますが、実はこれはブラーフミー文字の第1字とフェニキア文字の第1字を組み合わせたものです。

2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究所の略称である「AA研」と上のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行され、商標として登録されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp

URL <http://www.aa.tufs.ac.jp/>

Research Institute for Languages
and Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies,
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, JAPAN
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

AA研へのアクセス

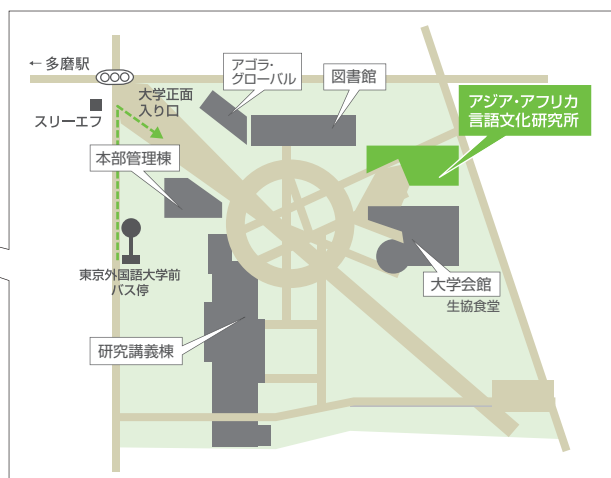


■JR中央線「東京」駅～「武蔵境」駅、約40分

JR中央線「新宿」駅～「武蔵境」駅、約20分

■JR中央線「武蔵境」駅より西武多摩川線に乗り換え、「多摩」駅下車、駅より徒歩約5分。

■京王線「飛田給」駅北口または「調布」駅北口より「多摩」駅行きバス乗車、「東京外国語大学前」停留所で下車、停留所より徒歩2分。
「飛田給」駅北口から約13分間隔でバスが運行。所要時間約7分。
「調布」駅北口からは20～30分間隔で運行。所要時間約20分。
バス時刻表は <http://www.bus-navi.com/>



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所 要覧2011

編集：広報担当(基礎データ班:中山俊秀・伊藤智ゆき・小田淳一・澤田英夫・塩原朝子・陶安あんど・中谷英明・錦田愛子) 表紙デザイン:小田マサノリ 本文レイアウト:鎌田幹子 発行:2011年6月15日

■ アンマン市内の教会での堅信礼

イエス・キリストが洗礼を受けたヨルダン川の東岸は、今では人口の9割をムスリムが占める。一方でいくつかの街には今もキリスト教の教会もあり、日常的に信徒が集まる。知り合いの娘さんの堅信式では、典礼がアラビア語で行われていた。

撮影場所：ヨルダン・ハースム王国アンマン

撮影者：錦田愛子

撮影日：2004年4月